

てかける。

この写真が「つきあいはじめたばかりの相手」である。

次にプラスチックのカプセルがたくさん入った箱が登場。そのカプセルの中には「相手があなたに言うかもしれない言葉」が書かれた紙が折り畳まれて入っている。



「今度、デートしない?」「うちに遊びにおいでよ」「キスしてもいい?」「観覧車に乗ろうよ」

「今日は素敵な服だね」「結婚しようよ」さあ、あなたはなんと答えるか。声に出してみる。

紙を目にしてかたまってしまう当事者も。答えに詰まるとお助けカードを使いながら、ロールプレイを試みる。

はじめはイエス、ノーだけだった答えが「ちょっと考えさせて」「友達に相談してからにするわ」などバラエティ豊かになっていく。要領を得てきたら次々に違うカプセルに挑戦。

はじめはスタッフと個別で、また女性だけ、男性だけという少人数グループで実施。そして、今度はみんなの前でと段階をふみながら、暗証問題から応用問題へと楽しみながら挑戦していく。

これを日常的に応用するにはトレーニングを重ねる必要があるが、いろんな表現ができるコミュニケーション上手をめざすのがねらいである。



彼らに「えっち・セックスって何?」「ラブホテルって何?」などの質問を投げかけてみると、いつも無口なSさんが積極的に口を開く。それに便乗するかのように口々に自分たちの持っている知識を披露してくれる。あやふやな部分もあるが、雑誌・スポーツ新聞・コミック誌・ビデオ・バラティー番組から得た情報をみんなに提供してくれる。中には、身近な人の話で得た情報やインターネットを通じて得た情報もあり、その中身はかなり正確なものも含まれていた。私たちの想像以上に彼らは知っているのだ。ただしこれらは、支援者が一人でもいる前ではぴったりと口を閉ざしてしまい、きいても「知らない」「わすれた」…としっかり子どもを演じはぐらかすのである。

⑦困った行動・こだわりへの援助

知的しょうがい者の性行動がなぜ問題視されやすいのか。

まず、知的しょうがい者は子ども扱いされ、性的発達が遅れていると誤解されている。また、自分のカラダや性について学習する機会がないため、性的表現の仕方や大人としての社会的行動のとりかたについて教えられていない。

人前で性器を露出したり、抱きつくなど「困った行動」がみられるのも、性教育が不十分なため、性に関するプライベートな行動とパブリックな行動の区別ができにくいからである。彼らは性的欲求を適切に発散・コントロールする方法がわからずに、イライラしている。

「困った行動」は行動直後の刺激強化によって形成され、維持されている。

つまり、まわりが困るようなことをしたら、怒られるにしろ驚かれるにしろ注意をひくことができる。注目されるというのは強い刺激なのである。

注目され、刺激を得ようとするため、その行動は繰り返される。

ではどうしたらいいのか。それは当事者ひとりひとりの欲求や表現のしかた（「困った行動」としての出方）が違っているのだから、対応の仕方にマニュアルはない。まず、困った行動の原因を見極めることが大事である。誰かの注意を引きたいのかもしれない。なにか緊張や不安があるために気を紛らわせる行為なのかもしれない。原因を突き止めるには、いろいろ対応を変えながら、行動がどう変化するかで判断していく。

性器いじりと見えたが、実は性器が痒くてさわっていたり、下着のゴムがきつかったということもある。事実と真実を見分ける必要はとても大切である。

次にどのようなアプローチが有効なのか。

言葉での説明よりも視覚からの情報のほうが理解しやすく、手を添えるなど行動見本を示すほうが効果的である。ひとつの場所ではひとつの活動という取り決めや、注意力をサポートする声かけ（「はい」「次は」など）、成功の課題はわかりやすいものにする、はじめと終わりははっきりさせるなどを心がけて関わる。

できるようになれば「やったね！」「できたね！」など褒め言葉を。さらに共感的な声かけがよい行動を強化していく。

できることが当たり前になったときにも「しっかりできるようになったね！」「続けられてるね」と相手を認めることが大切である。

また、複数の支援者によって複数の場面できりかえし伝えていくことが問題を避けるコツである。しかし、なかなか効果が現れにくく、その効果が出てくるまでもさらに行動が激しくなったり、より多彩になったりすることもある。さらに当初困っていた行動が消えたかと思えば、別の場面で違った形になって出てくるといったこと

もある。当事者が支援者の気持ちをはかたり試したりするためである。こうなれば当事者と支援者の根くらべ。乗り越えていくための鍵は「この人なら信頼できる」という人間同士の情緒的絆を築くこと…これは支援者と当事者がともに作り上げていくものである。

<困った行動>

- ①注意引き
- ②嫌悪な事態の回避
- ③緊張・不安からの解消
- ④苦痛に対する反応
- ⑤退屈からの逃避
- ⑥仲間からの承認など

<こだわりの援助>

- ①根底にある原因を理解する
- ②不安や恐れを減らす
- ③少しずつ段階的に変化させる
- ④代替活動を準備する
- ⑤いつ・どこでならよいかを決める
- ⑥約束は実行の可能性にあわせる
- ⑦あいまいな妥協をしない

行動プロセスや意味を理解しないうちに、症状や表面的な現象だけをみて断定したり、見立てたりすることは、それ自体偏見や差別を含んでいることである。

まず、自分自身の中の常識や既成概念を見つめなおしてみる必要がある。

すべてのコミュニケーションは、メッセージの内容よりもメッセージの伝わり方・伝え方によって影響されるものである。（二人の関係、人間観、

価値観、態度、表情・・・)

そして、伝え方はすべてI（あい）メッセージで・・・。「私は悲しい」「私はつらい」など。

アサーティブの方法

＜原点＞誠実・対等・率直・自己責任

要求を相手に伝えるということは、自分の要求と気持ちを「伝わるように」伝えることであり、相手を責めても自分が我慢しても問題解決にはならない。

大切な課題に対して、はっきりと自分の意向を相手に伝えることは、問題解決の一步を自分から踏み出すことを意味する。

5、支援の実際【結婚支援】

「結婚したいというカップルへの支援をするのだが、オブザーバーになってくれないか？」知的しょうがい者へのセクシュアリティ支援を通じてかかわりのあった自立生活支援施設からの依頼をきっかけに、私たちは「結婚支援」という未知の分野に足を踏み込んだのである。

2004年春から始まった結婚支援は現在でも進行中であるが、今までに見えてきたことを報告したい。

結婚＝結婚式？

「結婚したい」カップルは、AさんとBさん、CさんとDさんの2組。それぞれグループホームでの生活や、ひとり暮らしをしながら、関連施設に通所している。

AさんとBさんは2004年の9月か10月に、CさんとDさんもできればそのころに「結婚式をあげ

たい」と考えていた。

さて、まず私たちは彼らが結婚をどのようにとらえているのかを知りたく質問してみた。すると2組とも「結婚式」「披露宴」「教会ですか、施設を利用するか」「ドレスが着たい」という話ばかりが出てきた。どうやら彼らのイメージする結婚とは「夫婦となつての生活」ではなく「結婚式」のようである。

そこでお互いの気持ちや、相手への思いを確認しようと、「相手のどこが好き？」「お互いになんて呼んでるの？」などと聞いていった。「手をつないだことある？」との質問に対し、CさんDさんカップルは手をつないだことがないと言う。予想外の答えに「つきあつてるのでしょ？デートしてないの？」と尋ねると、このカップルはまだデートをしたことがなかったのである。お互い好きどうしだから結婚すると言ひ、結婚式の夢を次々に話したすのだから正直驚いてしまう。

AさんBさんカップルは「手をつないだり肩をくんだりするよ」とその場で実演してくれたりとスキンシップは積極的で、堂々としていた。

生活基盤をつくるために

結婚の形態や生活スタイルについての話し合いは、4月から時間をかけて行われた。

「住むところは？」「生活資金は？」「金銭管理はどうする？」「婚姻届を出すのか、事実婚にするのか？」「新生活に必要な生活用品は何で、どうそろえるのか？」「食事は誰が作る？」「洗濯は誰がする？」…書いていくときりがなような生活の細部にわたることもリストアップしていく。

この話し合いのなかでは「そこは私ができる」「それはぼくがする」「ふたりともできないことはヘルパーさんに頼もうか？」「ほかにも手伝っ

てくれる人がいないか？」…というふうに、すべて自分たちだけであるのではなく、また、すべて支援者に任せるのでもなく、自分たちができると、できないこと、どの部分に支援が必要なのか、誰が助けてくれるのかということを考えてながら折り合いをつけていくことがポイントであった。

明かりがないと眠れない

さらに話し合いは生活習慣のすり合わせへと進んでいく。他人同士と一緒に暮らす結婚生活ではふたりの異なる生活習慣をどう受け入れあっていくかが大切なことはいままでもない。しかし彼らはこういった許容範囲を設けて妥協しあうことは得意ではない。

それぞれの生活習慣を話していくと、まったく違う事もあり、寝るのはふとんかベッドか、寝る時間起きる時間、寝るときには明かりをつけるか消すか、食事の時間、食べ物の好み、お風呂の時間、お湯の温度…これもきりがいいほどあるわけだが「私はこれは譲れないからここは我慢する」というコミュニケーションをこれまで彼らはほとんど経験してこなかったのである。

イエスかノー、白か黒という選択形態が多い彼らには、電気はつけるか消すかのどちらかであって、「ベッドサイドに手元だけ照らすライトを置く」とか「どのくらいの明るさなら大丈夫なのか」といったやりとりは存在しなかった。それをひとつひとつ解決していかなければならないのだから結婚生活スタートまでのゴールがとても遠く感じた。

コミュニケーションをとりあって折り合いをつける難しさを、7月以降に始めた「お泊りで結婚生活の練習」によって当事者カップルも支援者

側も痛切に感じることになる。「となりの部屋の電気をつける」など中間のアイデアも出てこなかで、支援者や私たちがお互いの言い分をじっくり聞き、相手の思いを伝えたり、妥協点を探して提案したり…と根気よく話し合っていく姿勢が求められた。

子どもの応援に後押しされて

結婚に対し祝福されたいと思うのはどんなカップルでも同じ。AさんとBさんのカップルも、Aさんの金銭管理をしてくれている叔母さんと、Bさんの子どもの理解がとれるかが心配の種であった。

Bさんには高校生になる子どもがいる。Bさんとその子どもは別々に暮らしているが、いずれ一緒に暮らすようになるのか、子どもが同居した場合うまくいくのか、その前に子どもが結婚にOKを出してくれるだろうか…と悩んでいた。幸いBさんの子どもは結婚に賛成してくれBさんにとってそれが大きな励みになったようで、3人で会って食事をしたり、買い物に行ったり、子どもが住む施設に送っていったりと「家族体験」を積み重ねていった。

ピンチがチャンスに変わるとき

一方、CさんDさんカップルもそれぞれの家族を説得しなくてはならない。障害者どうしの結婚は家族にとっては金銭的負担や精神的負荷の増大という心配や不安が発生する。

そこで、家族の説得にあたって、障害年金・生活保護・支援費制度などの福祉制度を利用すること、住むところはグループホームであり、ヘルパ

一や支援者たちによる生活上の協力があることなどを話していった。

そんな頃、緊急事態が起った。CさんDさんの家族を交えて話し合いをしようとお食事会をすることになった矢先、Dさんが体調を崩し、入院することになってしまった。

しかしCさんは毎日Dさんのお見舞いに行き、病室で付き添っていたDさんのきょうだいと顔を合わせた。それで毎日お見舞いに来るCさんの気持ちがDさんのきょうだいにも伝わったのである。Dさん自身も「こんなに毎日来てくれるのは本当に私のことが好きだから」と確信を得ることができたようだ。

CさんとDさんは当初から「結婚する」と言うわりにはスキンシップがなかったカップルだが、この時期にはやっと手をつないだり、腕を組んだりできるようになっていた。セッションが終わると夜の10時すぎになってしまうため、Cさんが自転車でDさんのグループホームに送るのも自然な光景になった。この夜の時間だけが、ふたりっきりになる時間なのである。

またDさんの誕生日にはCさんがネックレスをプレゼントするなど、恋人らしくなりつつあった。

お泊りで結婚生活の練習

AさんとBさんは7月から、CさんとDさんは11月から「ふたりでの生活」の感覚をつかむために、「週末などにお泊りして結婚生活の練習をしよう」（題して『結婚の練習』）ということになった。

『結婚の練習』はふたりの生活習慣の違いにどう折り合いをつけていくのかをトレーニングする機会なのだ。

CさんとDさんの場合、はじめての『結婚の練

習』でDさんがしんどくなってしまった。

ふたりでふとんをならべて寝たが1時間おきに目が覚める。電気がついてないと怖くてしかたない。食事は向かい合って鍋をつつくのだが、何を話したらいいかわからない。苦しかった。ふたりでいたいと思っていたのに、ふたりっきりになると息がつまる…Dさんは結婚を躊躇しはじめた。

Dさんの迷いはそれからずっと続いている。Cさんのことは好きだし、いっしょに暮らしたいと思う。でもふたりっきりになるのが怖い。いっしょに寝るのもいや。今のグループホームの心地よい生活を手放すのは不安だ…ということを考えて堂々巡りが続く。

「ふたりの生活ってこんなもの」というのが、とくに施設での生活がながい人には見えてこない。夫婦の生活を見たこともないし、知らないからふたりきりになってどう接したらいいのかわらないのである。

コミュニケーションギャップ

あるとき、夜中に携帯電話がなり出してみると「結婚やめる！」とAさんがまくしたてる。「それならやめればいいよ」と答えたものの、いったいどうしたのかと聞くと、「Bさんに回し蹴りをされた。こんな暴力的な人とは暮らせない」と言う。

Bさんは自分の感情を表現するのが苦手で、ちょっといやなことがあると大きな声を出して爆発することがある。電話があった次の話し合いのとき、ふたりは気持ちをぶつけあった。Bさんはほかに言いたいことがあったのだが、言えなくて、それを表現しようとするると暴力的な行為や言葉になってしまうのである。

しかし、そういう気持ちのずれや喧嘩があるのは当たり前のこと。彼らはそういうことを今まで経験してこなかったのである。

お互いを知ることがこんなに大変なのか、結婚って難しいのだというのが彼らにも少しずつ見えてきたようである。

AさんBさんは2004年9月27日に無事結婚式を挙げたが、毎週のように『結婚の練習』をしていたものの、いっしょに暮らし始めるとそれまで出てこなかったふたりのずれが表面化してきた。そのずれがでてきたときにコミュニケーションをとるのが難しく、伝えられない、聞けないために、食い違ってトラブルが発生している。

そんなとき支援者や私たちが仲介に入り、確認する、整理する、伝えるといった作業をいっしょにすることが結婚支援の大きな柱になっている。

必要なのは現実的な体験

それぞれのカップルと私たちが直面してきた数々の問題は「結婚生活を知らないし、想像もできない。だからどうふるまったらいいかわからない」という彼らの状況が反映された結果だった。

セクシュアリティ支援のなかで「デートをプランニングする」というプログラムを実施したとき、恋人同士の写真やビデオをたくさん見たものの、当事者たちにはピンとこず、実際に街中でデートをしているカップルを見に行き、それで「デートって腕を組むのか、いっしょに歩くのか、お茶を飲むのか」ということがわかってきた。

結婚生活も同じで実体験がないから実感できない。グループホームの3～4人での生活ではなく、2人用の家具があって、掃除機があって、冷蔵庫に何がどれだけ入っているかというような「ふたりだけの生活」の感覚をつかむのが難しい。

だから「あなたたち夫婦の生活をビデオで撮って見せてよ」って言われた。「ご飯を作っています」「これからお風呂に入ります」と、家庭での生活場面のほんの一部だけを見せたのだが、それでも彼らは「わかった!」と納得してくれた。ドラマで見ても実感できないのだが、知っている人の生活を見て、はじめて納得するようだ。

さらにすすんで、家によんで生活を感じてもらうことが必要になるのかもしれない。

結婚に至る過程で私たちが当たり前のようにわかっていることをひとつづつ具体的に提示していき、そのうえで生活の場を見る環境があればよいと考える。



まだまだ続く結婚支援

結婚支援というのは結婚式を挙げたから、いっしょに暮らし始めたから終わりではなくて、そのあと、とくに最初の1ヶ月、3ヶ月、1年という節目には振り返りをしながら見守っていくことが必要だと感じる。

2004年9月27日のイベント内で人前結婚式をあげて、いっしょに暮らし始めて半年すぎたAさんとBさん。2005年2月12日のイベントで婚約宣言をして、これから結婚まですすむ決意をしたCさんとDさん。

AさんとBさんは「新年会するからおいでよ」とCさんDさんを家に招待したり、私たちとは違う視点で話をしてくれる。彼らが結婚での先輩としてそういう役割を担ってくれることは大きな効果があると思う。

この結婚支援での経験は、今後の「知的しょうがい者へのセクシュアリティ支援」に生かされていくのは間違いないと感じている。

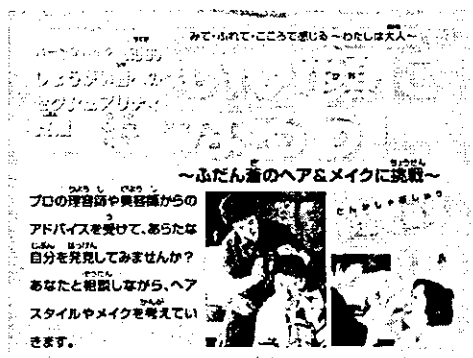
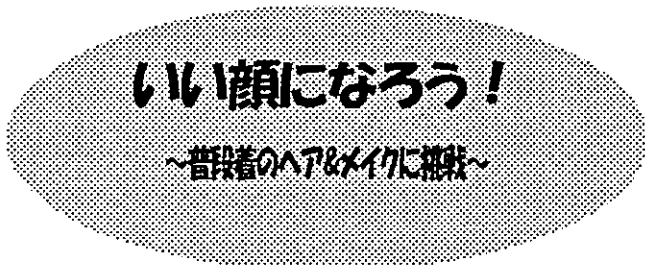


6、支援の実際 [イベントの実施]

学習会で知識を得たり、ワークショップで体験するだけがセクシュアリティ支援ではない。

ここで紹介するようなイベントもハートブレイクでは、セクシュアリティ支援のひとつとして考えている。

①いい顔になろう



おつきあいするなら健常者?

知的しょうがいのある人たちがプロの美容師・理容師さんと相談して自分の好きな髪型にし、化粧をしたりしておしゃれを楽しむためのイベントとして実施したのが『いい顔になろう!』で

ある。

このイベントはひとりの女性の何気ない一言で始まった。

セクシュアリティ支援プログラムの一環でデートについて話し合っていた時「お付き合いするのはどんな人がいい?」と質問をしたところ、ある女性が「しょうがい者はイヤ。健常者がいい」と発言したのだ。

その理由を聞くと、「しょうがい者はダサイ(?) もん」。

そう言われ、改めて考えてみると、知的しょうがいを持つ人たちの服装や髪型は・・・最近ではさすがにジャージ姿は少なくなったが、同世代の人たちと比べるとファッション感覚がないようにも思える。髪型は子どものときから短く切り揃えられ、思春期をすぎてもカラーやパーマをしないでいる人が多い。

服も親が選んだものばかりであるとファッションセンスも育ちにくいのかもしれない。

それならばかっこよくなればいい!!と思い、理容師さんに事情を話し理容室が休業日である月曜日に施設に来てもらった。

前髪を少しカットしたり、シャンプーで落とせるヘアカラーを使ったりして髪形を変えていく。また100円ショップで買ってきた化粧品でのメイクもしてみた。化粧をしたことのない女性に「100円だったら買えるし、してみようかな」と話していた。

参加した皆さんがステキに変身することができ、笑顔の輪も広がっていったのである。それならば・・・とミニファッションショーもその日に開催した。

クレームがくるのではとの心配と反対に「楽しいからもっと規模を拡げてみては」という意見がでて、その施設が中心となり本格的な「おしゃれ宣言」開催実施へと繋がっていった。



イベントでは笑顔がいっぱい

『いい顔になろう!』はハートブレイク主催で、日常的な身だしなみから、ヘアメイク、服選びなどでおしゃれ感覚を身につけてもらうことを目的に実施した。



理髪店や美容院に行っても親が髪形などを指示をしたり、理美容師さんがこんな感じでいいだろうとやっているものを、「もっと自分の希望を言って好きなようにしてもいい」と彼らに伝えていく。そして自分の好みを知って自分で決めていくということを経験して欲しいと考えた。

本人の意見を十分反映させ、その人らしさを存分に発揮してもらい、見た目にもかっこよく、ステキになることが目的なのだ。

●お気に入りの髪型になった!

参加者には「髪の長さはどれくらいにしたいか」「仕上がりはフワフワにしたいか、サラサラにしたいか」「やってもらう理美容師は男性がい

いか、女性がいいか」など事前にアンケートをとり、当日、理美容師さんと話をしながらカットやカラーリングをしてもらう。



●男性スタッフによる髭剃り指導

ヘアカットの待ち時間などを利用して髭剃りの練習もした。剃る向きや剃刀を当てる強さによっては剃り残しがでてくる。希望者にはスタッフがひとりで出来るようになるまで指導した。



●頭皮診断からわかったこと

頭皮診断を担当した理容師さんによると、参加者のなかで頭皮がきれいなのは、たった一人だけだったそうである。「シャンプーをするときは髪の毛を洗うのではなくて、頭皮を洗いましょう。するときれいになってつやつやの髪の毛になるよ」とアドバイスしてくれていた。

●化粧より大切な洗顔

女性はメイクをする際、肌が荒れていて化粧の乗りが悪い人が多くいた。どのように顔を洗って

いるのかを聞くと、身体を洗う石鹸やボディシャンプーで洗っているという人がほとんどで洗い方も大雑把。化粧水や乳液を使ってスキンケアをしている人はほとんどいなかった。

これは化粧以前の問題である。生活習慣が出来ているようで出来ていないのだ。支援者も「洗っておいで」と言うだけで、きちんと洗えたかどうかの確認までは難しいのかもしれない。

おしゃれをしようと思ったら、化粧ができる肌という基礎が大切。ただ顔を洗えばいいのではなく、自分の皮膚を大切にすることを意識する。それが自分を大切にすることに繋がるわけである。

ワークショップの宿泊時に身体の洗い方を見ていると、タオルで洗わずに手で身体を洗っているため、手の届かない背中では洗えていないという人もいた。シャンプーの次にリンスをしたらいいというのではなく、ていねいに洗ったあとの気持ちよさを実感できるかどうかが大変である。

かっこよさというのは表面のおしゃれだけではなく、そこに行き着くまでの基本が肝心。施設や作業所、家庭でも具体的にもっと丁寧に伝えていかなければならないようである。

とくに乳幼児期から家庭で伝えていくことが大切だと感じた。



●みんなが元気になる セクシュアリティ支援

下着からのおしゃれも考えていく必要がある。知的しょうがいを持つ女性の多くは、年配の方

がはいているような下着を身につけている。下着も自分に合うもの、着ていて気持ちいいと感じるものを自分で選んで欲しい。

自己選択・自己決定することを彼らはあまり経験していない。あてがってもらったものだと、フィットしていなため気持ち悪くて、落ちつかなくなったり、集中できないということもある。

支援活動のなかで下着の話をした一ヶ月後に、ある女性が初めて自分のこずかいで可愛いショーツとブラジャーのセットを買ったとニコニコしながら見せてくれたことがあった。

恋人が欲しいのなら自分で中身から変えていこうとする。そして自分をアピールする・・・おしゃれというのは自分を元気づけるためにとっても大切だと感じた。

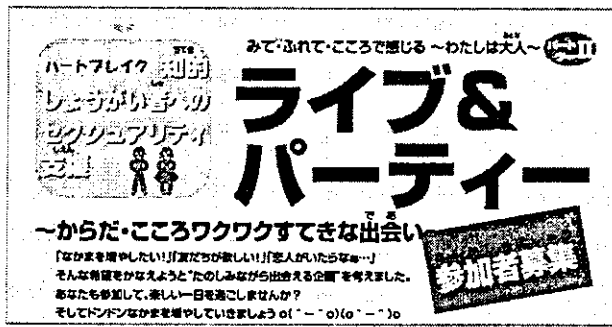
女性の一言が大きなイベントに繋がっていったのだが、その後の施設はどのように変わったのだろうか。私たちから見る限り、当事者だけではなく支援者たちはみんながとても明るくている。

イベント『いい顔になろう!』では支援者もいっしょにヘアメイクをしたのだが、その時の支援者たちはいきいきして、当事者からも「かっこいい!」などと声援が飛んでいたほどであった。

支援者も動くし汚れるからという理由で、意外とおしゃれには無頓着のようである。

施設で働くからおしゃれはいらないのではなく、自らおしゃれをして当事者にもすすめる、みんなかっこよくて明るくなるというのがセクシュアリティ支援の第一歩ではないだろうか。

②ライブ&パーティー



楽しみながら出会いの機会を

これはタイトルどおり、ライブでカラダとこころをワクワクさせ、パーティーで新しい出会いを楽しもうというイベントである。

知的しょうがいのある人たちが経験しにくい二つのイベントを一度に楽しもうと企画した。

ライブやコンサートでは「奇声を発したりして演奏の妨げになるのでは」との心配から知的しょうがいの参加が敬遠されたり、本人や支援者側の「迷惑をかけては・・・」という思い込みにより、生演奏を聞いたことがない人が多いようだ。

ライブは感情を豊かに発散させカラダで表現できる。その感覚を体感してもらおうというのがねらいだった。

パーティーは「出会い」が目的。ピアカウンセリングやピープルファーストなど各種の活動に参加している人はいろんな出会いがあるようだが、多くの人が作業所やグループホーム内だけの出会いしかない。極端に狭い行動範囲のなかで出会いを待っていても誰もやってきてはくれない。

PRのために私たちがかかわった多くの施設や作業所にチラシを送って参加を呼びかけたのだが、「うちの施設の人たちはそういう出会いに興味がありませんから・・・」「出会いなんかあって、その後どうするんだ?」といった反応も返ってきた。学習会ならいいけれど、ライブやパーティー

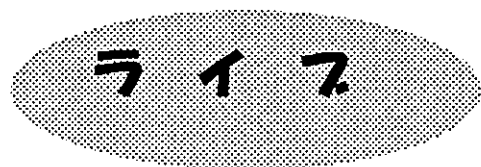
には親や支援者たちは二の足を踏むのだ。

参加費の問題もあったようだ。金額は「彼らはいくらまでなら出せるか」と、ある施設に相談した結果 3500 円と設定したのだが、他の施設にとっては高いというイメージがあったようで、「無料なら行くのだけど」という人もいたほどである。

ここでわかったことは、知的しょうがい者たちは自分がやりたいことや欲しいもののためにお金を貯める習慣が身につけていないということであった。

今回参加した当事者たちのなかには、自分で仕事をして得たお金をパーティーのために貯めていた人がかなりいた。団体で参加した施設ではそのような支援をしているわけである。

「欲しいものがあつたらお金をためて買う」というのは生活支援。募集するときにはそこまで読めていなかったのである。



ライブハウスのような照明ができないけれど、なんとか雰囲気を出そうと照明も手作り。

ロックの大音響にしょうがい者たちが耐えられるのだろうかと不安になり通常より音量を落としてもらったのだが、そんな心配は杞憂のよう

であった。

なんともいえない表情で集まってきた知的し
ょうがい者たち。最初は緊張して椅子に座って固
くなっていたが、舞台上の奏者から「手拍子！」
とか「立ってもいいよ！」とか声をかけられてか
らは、自然にリズムにのりカラダを動かしていた。



パーティー

ゲームや告白タイムも

パーティーの冒頭では当事者カップルの「婚約
式」をした。このカップルは当初結婚式をする予
定であったが、慌てて結婚するのはやめて、この
先時間をかけて結婚へ向けて歩んでいこうと考
えだしていた。それならば「婚約式にしよう！」
ということになりこの日をむかえたのである。

二人の入場があり、ご家族も来られている。祝
電も届いたし・・・とまさに結婚式並み。

参加した当事者はそれを見て「私にも出来るか
もしれない」と結婚を身近に感じられたのではな
かろうか。



「婚約宣言」を読みあげるお二人。



パーティーでは気楽に楽しめるような企画を
いくつか用意したのだが、一番盛り上がっていた
のは「占いコーナー」であった。まさに今の若者
たちと同じであることを実感した。



もっと気軽に参加できるパーティーやライブ
があり、彼らが外に出て行きいろんな人と出会う
機会が増えることはコミュニケーションを実践
しQOLを広げ高めていくことに繋がると考え
ている。

7. アンケート調査結果

ハートブレイクでは、2005年2月に知的しょうがいを持つ人を対象に「性に関する調査」を実施した。これはハートブレイクが関わっている3団体のみへのサンプル調査であり、全体を把握するには不十分なものであるが、興味深い結果が見えているので一部を紹介したい。

対象者・・・青森県・大阪府・沖縄県に在住する

知的しょうがい者54名

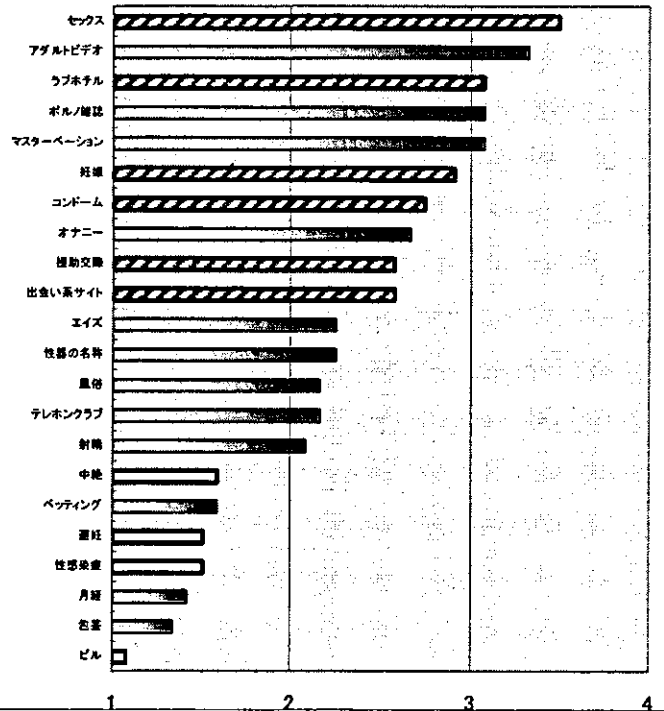
調査方法・・・同性の支援者による面談調査

「性に関する言葉の認知度(10代および20代)」各言葉に対して「1.全く知らない」「2.あまりよく知らない」「3.知っている」「4.正しく理解している」のいずれかに分類し、平均値で表したものが右のグラフである。

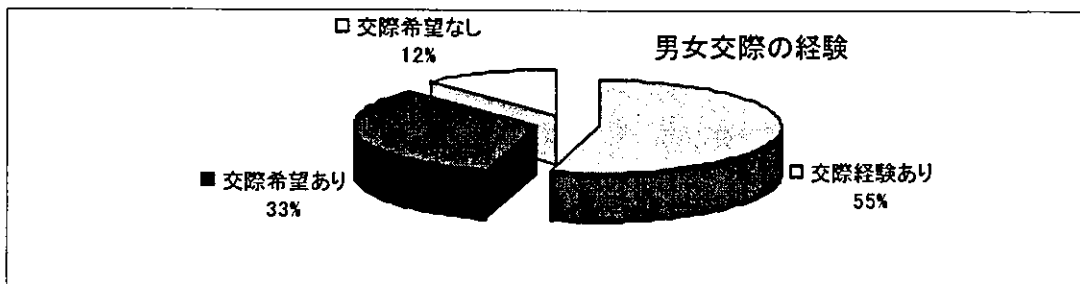
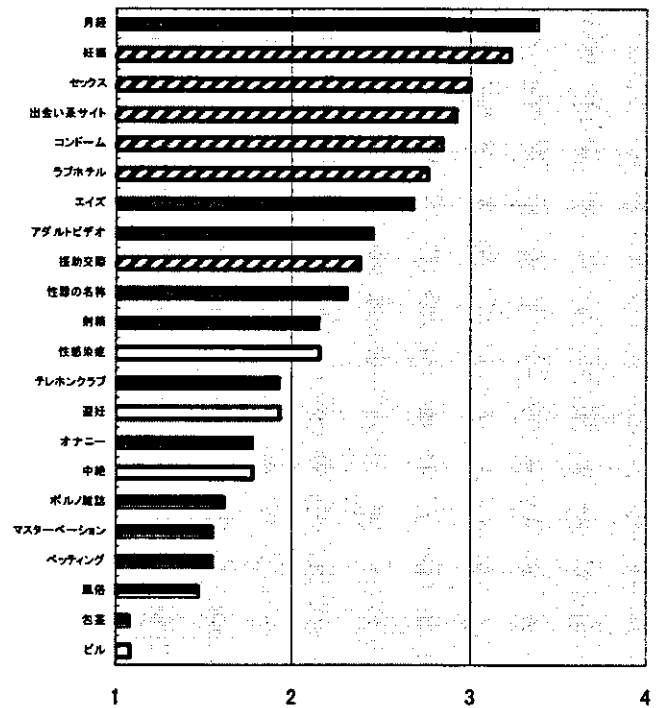
性行為・性情報に関する言葉である「セックス」「妊娠」「ラブホテル」「コンドーム」「出会い系サイト」「援助交際」などが男女ともに高くなっている。これらはマスメディアや仲間・友人から情報を得ているのであるが、指導者・支援者から得るべき「ピル」「中絶」「避妊」「性感染症」などの知識については認識度が極端に低いと言わざるをえない。

「男女交際の経験がある者」または「男女交際を希望している者」を合わせると85%を越えているのだが、この状態を放置すれば、「望まない妊娠」「性感染症」の増大が容易に推測されるのである。

性に関する言葉の認知度(10・20代の男性)



性に関する言葉の認知度(10・20代の女性)



8. おわりに

ハートブレイクは、しょうがいを持つ人たちだけを対象としてセクシュアリティ支援を実践しているわけではない。「セクシュアリティとはすべての人が活力あふれるための重要な要素であり、しょうがい者も例外ではない」というスタンスで活動している。

ハートブレイクが主催する学習会などでは指導者と受講者という関係を出るだけ排除しようと、名札ひとつをとって「自分が呼んでほしいなまえ」を書いてもらっている。しょうがい者たちと話していると外部からは子ども扱いをしていると批判を受けることもあるが、「指導者から仲間」になってこそセクシュアリティ支援のスタートとなりうると考えている。「教えなければ」「導かなければ」と思えば思うほど彼らは聞く耳を持たなくなり、「ハイハイきいてあげますよ」「おとなしくしていたら、いいんでしょ」となってしまうのである。

いかに短時間で「なかま」となれるかが支援の「かぎ」といえる。毎回雰囲気をつかみとりながら工夫をこらせるだけの多くの経験を身につけていき、その時々状況を察知して、瞬時に動けるようなコーディネーショントレーニングを今後もつんでいくとともに、支援者へのスキルアップのための有効なトレーニングも考えていかなければと考えている。

思春期前半から親離れをしていくためには「勢い」、そして不安解消のために友達と「群れる」ことが大事になる。しかし、しょうがいを持っていて、変わったやつと阻害され、本人も一人の方が楽という方向に向き、孤立・孤独化していきやすい。中学・高校と進むにつれ、よほど周囲の意識と支援がないとその傾向は顕著となり

うる。

また、養護学校では健常児との交流も少なく、夏休みなどであっても親や教師以外の地域での大人との関わりも少ないため、いろいろな人、いろいろな場面、いろいろな立場でのコミュニケーションの持ち方を経験してきていないのである。

なかまと群れ、異質な人間同士がどう折り合いをつけ、自分らしさを発見していくかという過程での経験不足からくるコミュニケーションギャップをおこしている。

このコミュニケーションの基盤なくして「望まない妊娠」「性感染症」「性的被害・加害」の知識だけを伝え、禁止管理していこうとしてもその場かぎりの対処療法に他ならないと考える。

彼らは押えられ、管理されればされるほど抜け道を模索し、自分の殻にとじこもり子どもを演じていく。時には爆発を起こし感情のコントロールが出来なくなって周りが驚く行動にでてしまうことさえある。人と人の距離のとり方を測り対応していくことの難しさは年を重ねるほど大きくなっていくのである。

そこで、幼児期からの医療・教育・福祉の包括的な支援プログラムを作り積み重ねていく必要性を痛感している。

彼らは家族といる時も、学校・施設の友達といる時も、普通でない・変わってるという擦り込みを受け、孤独で、おもいきり楽しむという経験をほとんどしていない。

仲間と一緒に同じことや同じ場面でおもしろがって笑ったり楽しんだりする体験が少なく、喜びや仲間といる心地よさを十分に知らないのである。そして、相手のことが気になる・知りたいというわくわく・ドキドキの感情などの体感が少ないために辛さを乗り越える力が足りなくてすぐに落ち込み動けなくなってしまうのである。

「ライブ&パーティー」のような出会いの機会をいかに多く体験させていくかがセクシュアリティ支援には欠かせない要素と考えている。

また、何もかも「あてがいぶち」でなく、楽しく自己選択・自己決定していくためにおしゃれ感覚をきっかけにしようとした「いい顔になろう」は新たな自分の発見と自己肯定感を取り戻すための体験学習にもなりうるということがわかっている。

「愛」「いのち」「死」そして「人間関係」は頭で覚えるものではなく、からだで覚えていくもの、知識で教えるものでなく、感じて身に付けていくものだと考える。

「ことば」より「文字」、「文字」より「絵」、「絵」より「立体」、「立体」より「体験」が有効であり、かつこれらを組み合わせていくことで、よりわかりやすく、伝わりやすくなり、行動変容もでてくるのだが、もっともっと有効な教材を開発製作していく必要を感じている。

まだまだこの実践はセクシュアリティの捉え方に気づききっかけの段階でしかない。リアルな体験を増やし生活そのものの中に溶け込んでいくためには、もっと具体的に提示していく必要がある。

現在も結婚支援を続けているのだが、妊娠・中絶・できちゃった結婚・育児・子育て・思春期・更年期・老年期へのアプローチへの相談も相変わらず飛び込んできていく。

LD・ADHD・アスペルガーなどの発達障害へのセクシュアリティプログラムの開発要望もでてきている。まだまだそれぞれに伝えるだけの知識も経験もない中で当事者・親・支援者たちと向かい合い、いっしょに考え継続できるような環境をいかに作り出していくか、そして今までセクシュアリティ支援を受講した人たちが次のステップを受けられる環境を、さらにスーパービジョンをも受け入れられる環境を提供できるかが大きな

課題だと考えている。

参考文献

- ・「男女の生活と意識に関する調査報告書」 日本家族計画協会 2003年
- ・「知的ハンディをもつ子どもたちへの性教育を實踐して」黒瀬久美子他 思春期学2000年
- ・「楽しい性教育 手作り教材のつくり方・いゆし方」南正子・黒瀬久美子
ハートブレイク2002年
- ・「知的障害者の豊かなセクシュアリティ支援報告書」コリアボランティア協会2001年
- ・「知的障害者と支援者の『性のワークショップ』」EPOブックレットNO2 2004年
- ・「知的障害者と支援者のエンパワメントプログラム支援事業『元気』」
社会福祉法人倉見苑2004年
- ・「スウェーデンにおけるノーマライゼーション理論の発展」河東田博
季刊TOMORROW1994年 あまがさき未来協会
- ・「知的ハンディをもつ人々の自己決定と結婚生活支援に関する一考察」河東田博
四国学院大学論集 第95号 1997年
- ・「知的障害者の人権」河東田博 明石書店 2000年
- ・「スウェーデンにおけるノーマライゼーション」河東田博 現代書館2001年
- ・「知的障害者の性教育に関する一考察」児島芳雄他 奈良教育大学紀要第45巻1996年
- ・「全国調査にみる性教育の現状と課題」児島芳雄 障害者課題研究第25巻 1998年
- ・「発達障害児に対する性教育の取組み」林啓也 障害者課題研究第25巻 1998年
- ・「人を育む人間発達論」服部祥子 医学書院 2003年
- ・「生涯人間発達論」服部祥子 医学書院 2000年
- ・「現代のエスプリ、スーパービジョン・コンサルテーション実践のすすめ」
編者江藤令子・深澤道子 至文堂2000年
- ・「現代のエスプリ、カウンセリングとソーシャルワーク」
編者江藤令子・深澤道子 至文堂 2002年
- ・「セックスボランティア」河合香織 新報社 2004年
- ・「ジェンダー論」東京大学98年度冬学期レポート 障害者の恋愛と性 柴谷明子
- ・「障害者が恋愛と性を語りはじめた」障害者の生と性の研究会 かもがけ出版1994年
- ・「知的障害者の恋愛と性に光を」障害者の生と性の研究会 かもがけ出版1996年
- ・「ここまできた障害者の恋愛と性」障害者の生と性の研究会 かもがけ出版2001年
- ・「障害児(者)のセクシュアリティを育む」人間と性教育研究協議会 2001年
- ・「素直に語りあいましょ」小山内美智子 2002年
- ・「知的障害のある人の性とその周辺を理解する」全日本育成会 2000年
- ・「障害をもつ人たちの性」谷口啓弘 1998年
- ・「性について話しましょう」コルゲレイ&フォルケソン1994年
- ・「心とからだの主人公にー障害者の性教育入門ー」山本直英 1994年
- ・「知的ハンディをもつ人々への性教育・エイズ教育」北沢杏子 1996年
- ・「ちえおくれの子と親と教師に/初級と月経のガイド」大井清吉・山本良典・河東田博
- ・「ちえおくれの子と親と教師に/男子の性と生活ガイド」大井清吉・山本良典・河東田博
- ・「ちえおくれの子と親と教師に/男女交際・結婚・家庭生活のガイド」大井清吉・山本良典・河東田博
- ・「ちえおくれの子と親と教師に/成人生活への援助」大井清吉・山本良典・河東田博
- ・「いつからオナ?どこから?」北村邦夫 集英社 2003年
- ・「サティスファクション」キム・キャトラル&マーク・レヴィンソン 角川書店2002年
- ・「コミュニケーション」ジョン・スチュアート&ナオミ・ブラウン 角川書店2002年
- ・「セクシュアル・ヘルスの推進・行動のための提言」松本精一・宮原忍
財団法人性教育協会 2003年
- ・「ジェンダーフリー・性教育パッシング-ここが知りたい50のQ&A」
浅井春夫・北村邦夫・橋本紀子・村瀬幸浩 大月書店 2003年

第2回 男女の生活と意識に関する調査 報告書

平成17年3月

目次

I 調査の概要	329
1 調査の目的	330
2 調査項目	330
3 調査対象	330
4 調査期間	330
5 調査方法	330
6 調査実施機関	330
7 回収結果	331
8 回答者の属性	331
II 調査結果の概要	334
第1章 これまでの日常生活や考え方	335
1 幼い頃の同性の友人との関わり	335
2 幼い頃の、他の年代の人たちとの関わり	337
3 中学生の頃までの生活	339
4 中学生の頃の成績	346
5 自分の外見についての意識	348
6 親からの虐待経験の有無	350
7 過去のつらい出来事の整理	352
8 ものごとの判断基準	354
9 人生の計画	356
10 性に関する事柄を知るべき時期	362
第2章 男女の関係性についての意識	382
1 異性と「付き合う」ということ	382
2 これまでに付き合っていた相手の有無	384
第3章 性の意識や知識について	391
1 避妊方法の主な情報源	391
2 中学生のセックス（性交渉）について	393
3 セックス（性交渉）することへの関心の有無	395
4 異性に関わることの意識	397
5 コンドーム利用促進策	399
6 低用量ピル（経口避妊薬）の周知	401
7 「緊急避妊法」「モーニングアフターピル」「性交後避妊」の周知	403
8 現時点で適切と判断する避妊法	406

第4章 自分自身の性行動	408
1 これまでのセックス（性交渉）経験の有無	408
2 この1年間にセックス（性交渉）をした相手の人数	410
3 セックス（性交渉）の相手が変わることについての意識	412
4 この1ヶ月間のセックス（性交渉）回数	414
第5章 初めてのセックス（性交渉）について	416
1 最初にセックス（性交渉）をした年齢	416
2 「初めてのセックス（性交渉）」のとらえ方	418
3 初めてセックス（性交渉）をした相手との知り合い方	420
4 初めてのセックス（性交渉）をするきっかけ	422
5 初めてのセックス（性交渉）の後の交際期間	424
6 初めてのセックス（性交渉）の時の避妊	426
第6章 現在の避妊の状況	430
1 ふだんのセックス（性交渉）の頻度	430
2 避妊についての相談	432
3 この1年間の避妊	434
4 コンドームを使わない最も大きな理由	440
第7章 予期しない妊娠の防止について	422
1 低用量ピル（経口避妊薬）の利用意向	422
2 周囲の低用量ピル（経口避妊薬）を使用者の有無	447
3 人工妊娠中絶についての意識	449
4 人工妊娠中絶の手術を受けた経験	451

I 調査の概要

I 調査の概要

1 調査の目的

現在の日本における、性や妊娠などに関する男女の意識がいかなるものかを、さまざまな側面から分析することを目的としている。

2 調査項目

- (1) 日常生活や考え方について
- (2) 男女の関係性について
- (3) 性の意識や知識について
- (4) 対象者自身の性行動について
- (5) 初めてのセックス（性交渉）
- (6) 現在の避妊の状況について
- (7) 予期しない妊娠の防止について

3 調査対象

- (1) 母集団：満16歳～49歳の男女個人
- (2) 標本数：3,000人
- (3) 抽出方法：層化二段無作為抽出法

4 調査期間

平成16年10月28日（木）～11月28日（日）

5 調査方法

調査員による訪問留置訪問回収法

6 調査実施機関

社団法人 新情報センター

7 回収結果

(1) 有効回収数 (率) 1,580人 (52.7%)

(2) 調査不能数 (率) 1,420人 (47.3%)

－不能内訳－

転居 91 (3.0%)

長期不在 36 (1.2%)

一時不在 311 (10.4%)

住居不明 46 (1.5%)

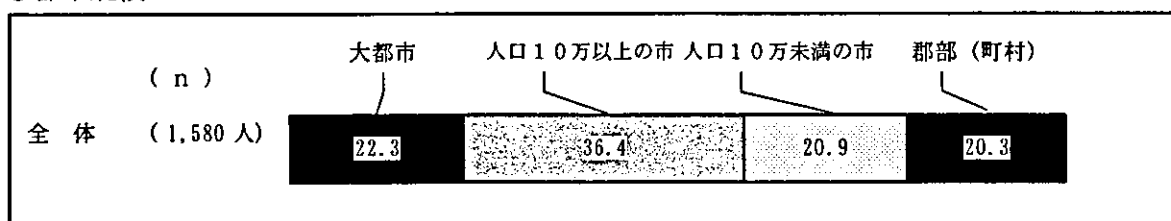
拒否 890 (29.7%)

その他 46 (1.5%)

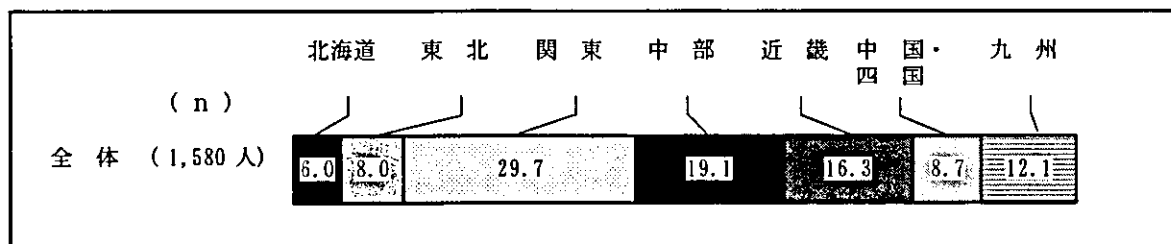
8 回答者の属性

(1) 都市規模・ブロック

●都市規模



●地域ブロック



(2) 性別

